

● 東 北

正 木 裕 美

東北でも3月から初夏まで公演の中止や延期が相次ぎ、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が音楽界へ色濃く影を落とした。しかし明るいニュースももたらされ、山形市内には5月13日、収容人数2001席、オーケストラピットも設営可能な大ホールを擁するやまぎん県民ホール（山形県総合文化芸術館）が開館した。10月31日には国内の複数団体や劇場の共同制作によるブッチーニ「トゥーランドット」（指揮＝阪哲朗、管弦楽＝山形交響楽団）も華やかに上演され、早くも大規模ホールとしての機能を発揮。既存の山形テルサとあわせて、芸術文化の新たな拠点として期待されている。

また福島市ではふくしん夢の音楽堂（市音楽堂）を拠点とする「音楽堂チェンバー・オーケストラ」が結成され、12月20日には初舞台を踏んだ。三浦尚之が芸術監督を務め、将来的には音楽堂常設オーケストラの発足を目指しつつ活動を行う。

仙台市では仙台銀行ホールイズミティ21を舞台に、吉岡知広（仙台フィルハーモニー管弦楽団首席チェロ奏者）が主宰する「イズミノオト」が始動した。ブラームス（2月8日）、ショパン（11月23日）と1公演に1人の作曲家をじっくり掘り下げ、告知チラシにはA4サイズ3枚分へ作曲家の年譜や生い立ちが記される。聴き手の知的欲求に訴えかける試みは、市内の宮城野区文化センターで好評を得る室内楽シリーズ「Music from Patona」とともに、早くも多くの音楽ファンを取り込んでいる。

コロナ禍ならではの取り組み——配信や地元ゆかりの音楽家の登用——も目を引いた。もとより東北のクラシック音楽界は東日本大震災後、その災禍を乗り越え「音楽でできること」を模索してきた土壌がある。コロナ禍に地元へ寄与する取り組みが多数見られたのは、ある意味必然と言える。

コロナ禍以降、東北における音楽界の再興を深く印象付けたのは、2014年以来6年ぶりの仙台フィルと山響による合同演奏会であった（7月12日・やまぎん県民ホール、18日・東京エレクトロンホール宮城）。プログラムは「東北UNITE～東北は音楽でつながっている～」をテーマに、「祈り」、「未来」、「希望」の3部で構成。もとよりこの合同公演は2012年、東日本大震災の被災者へ想いを寄せてマラーの「復活」を奏でたことに始まり、指揮はいずれも山響芸術総監督の飯森範親が務めている。コロナ禍で閉塞感の漂う地域社会に音楽で寄り添いたいと願うメッセージ性の強い構成は、じつに彼ららしい取り組みであろう。

山響は「オーケストラの芸術性を使って山形の魅力を発信していく」ポリシーのもと、他に先駆けて3月14日に無観客ライブ配信（第283回定期）を行い世間の耳目を集めた。花や白色有機EL（＝山形大学が世界で初めて開発）などの山形の特産品や見どころを織り交ぜた配信は、ライブ時だけで海外も含め3万人、のべ20万人以上が視聴したという。ヨーロッパに縁の深い常任指揮者の阪哲朗を指揮に据えたことで、地元山形を世界へアピールしようという積極性も垣間見えた。なお阪と山響は7月7日、25日、9月28日の3回にわたりベートーヴェンの交響曲シリーズを展開し、好評を博している。飯森、阪、首席客演指揮者＝鈴木秀美とラデク・パボラークの4指揮者体制も2021年には3年目に突入り、各々の特色を生かしたさらなる深化が期待される。

仙台フィルは3月から6月まで公演を中止し、7月から定期公演を再開した。公演における仙台にゆかりの若手音楽家の積極登用も目を引き、仙台国際音楽コンクール（SIMC）の入賞

者から第333回定期にチェ・ヒョンロク（p）、第338回定期に津田裕也（p）、第340回定期に友滝真由（vn）をソリストに迎えた。作品に内在するものを自身の音楽として昇華させる彼らの高い音楽性から、同コンクールが求める音楽家の資質が見て取れる。また仙台出身の郷古廉（vn）も12月の「第九」の代替公演となった特別演奏会「レガシー」（12月19日・東京エレクトロンホール宮城）に出演し、若手指揮者のカーチュン・ウォンとともに傑出したベートーヴェンの世界を作り上げた。なおウォンは降板した常任指揮者＝飯守泰次郎に代わる登壇であったが、ワーグナーの作品を後半に据え、これも聴き手の好感触を得ている。この曲目は3年がかりで展開してきたベートーヴェンを軸としたプログラミングの一環とみられる。2018年に飯守とレジデント・コンダクター＝高岡健、角田鋼亮の3指揮者体制に変わり、以前のフランス、ロシア、アメリカ路線から大きく舵を切った形だが、殊に飯守とベートーヴェンの交響曲第7番を取り上げた第339回定期（9月）ではその集大成ととれる味わい深い演奏を聴かせた。

仙台では秋の風物詩「仙台クラシックフェスティバル（せんくら）」が中止となり、代わる「クラシックエール仙台」が10月3、4日の2日間、日立システムズホール仙台で開催された。昨年の「せんくら」における120公演から15公演へと規模を縮小、会場も同ホール内のみとし、客席も半数以下の使用である。それでも仙台ゆかりの演奏家を中心に92名が熱演を繰り広げ、関連公演も含め来場者はのべ3,430人にのぼった。公演では在京の「せんくら」古参組でもある長谷川陽子（vc）、渡辺玲子（vn）や青柳晋（p）ほか、SIMCの入賞者・北田千尋（vn）も属するカルテット・アマビレ、仙台出身の津田（p）や大江馨（vn）、そして仙台フィルのメンバーらがベートーヴェンの作品を中心に披露。またNHKの連続テレビ小説「エール」主人公のモデルにもなった福島県出身の古閑裕而にちなみ、高山圭子（A）、武田直之（Br）らが「長崎の鐘」「栄冠は君に輝く」などを熱唱した。こうした趣向に加え、1公演あたり18歳以下700円から、大人は1300円からと安価なチケット代も、幅広い層を集める一助となった。

これに先立ち青森県八戸市では、永峰高志（vn、元NHK交響楽団首席奏者）がディレクターを務める「八戸イカール音楽祭」&「第10回イカール国際ミュージックキャンプ」が8月11日から19日まで八戸市公会堂文化ホールほかで行われた。植田克己（p）、宮谷理香（p）、澤和樹（vn）、西沢澄博（ob）ほか名手が集い、「ベートーヴェンの夜」と題した7公演や受講生へのレッスンをを行った。

また山形では、「やまがた芸術の森音楽祭2020」が10月10日、11日に開催された。（やまぎん県民ホール）。「映画の森」をテーマに太田弦率いる山響が山形ゆかりの音楽や映画音楽を繰り広げたが、中でも最上川と山形の季節の移ろいが目に映るような小曾根真のピアノ協奏曲「がみ」の再演は、この音楽祭の白眉であろう。当地での初演以来じつに16年ぶりの再演は、聴衆の熱狂的なスタンディングオベーションで幕を閉じた。

最後に東日本の復興支援活動についても触れておかねばならない。「音楽の力による復興センター」は被災地のコミュニティづくりに寄り添い、復興コンサートほか117回にのぼる活動を行った。活動では主に地元の演奏家を採用・派遣しており、センターはいわばマッチングファンドのような役割も担っている。また小山実稚恵が震災を機に立ち上げた親子体験型イベント「こどもの夢ひろば“ボレロ”」はやむなく中止の判断に至ったが、ミサンガのキットを無料配布し、その制作とSNSでの共有を通じて2021年11月の開催へ希望を繋げた。小山自身は宮城県丸森町を7月に訪れ、NHK交響楽団のメンバーとともに子どもたちへの鑑賞授業も行っている。

2021年は震災から10年。さまざまな関連コンサートが予定されている。